日比茂樹＝作

あの日のバッシー あの日のぼく

宮本忠夫＝絵

あの日のぼく

宮本忠夫＝絵

NDC●913
みんなの文学＝7
206P／22cm

書名●あの日のバッシー あの日のぼく

作者●日比茂樹©
画家●宮本忠夫
発行●株式会社金の星社
〒111 東京都台東区小島1－4－3
電話・03(861)1861
振替・東京0-64678
印刷●平河工業社
製本●東京美術紙工
初版発行●1981年12月

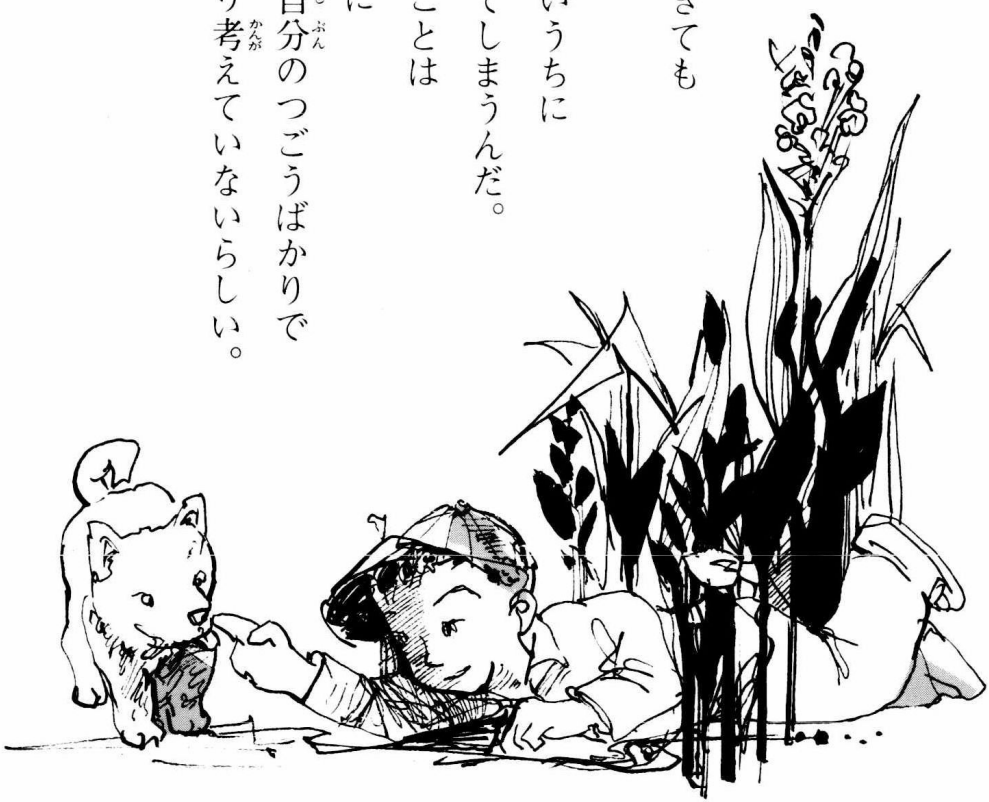
ISBN4-323-00522-9

Printed in Japan

乱丁落丁本は，ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめに

ぼくたちは、十年生きても
まだ子どもなのに
犬は、一年もたたないうちに
もう、おとなになってしまうんだ。
おとなになるということは
たいへんなことなのに
ぼくたちは、いつも自分のつごうばかりで
犬のつごうは、あまり考えていないらしい。



●あの日のバッシーあの日のぼく／もくじ

二ひきの野良犬　7
名まえはバッシー　20
コスモス　38
オンリーワン　49
けっこんてきれいき　63
ライオン丸　74
月見酒　90

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

決闘　107
わかれ　125
高宮公園　137
二ひきのバッシー　152
りんご　168
雪のふる日に　184
あとがき　204

あの日のバッシーあの日のぼく

日比茂樹＝作
宮本忠夫＝絵

1　二ひきの野良犬

慎一の家から十分ほど自転車をとばしたところに、伊奈沼という小さな沼があった。

一年生のころ、おとうさんにつれられてよくフナをつりにいった沼だったが、その後、近くの工場でよごれた水をながしたとかで魚がいなくなり、今ではほとんどだれもよりつかない。細長いくぼちに水がたまったくらいの沼なのに、アシはいちにんまえにビッシリと沼のまわりをつつみこみ、藻は岸から沼のまん中へんまでせりだし、それも人びとの足を遠のかせた理由の一つだった。

ところが四年生になった夏休み、たいくつしのぎに沼の近くを自転車で走っていた慎一が、じぶんのせたけの二倍もあるアシをかきわけかきわけ、沼の岸に立ってながめて見ると、藻のきれたあたりの水がやけにすみきっているのに気がついた。

いや、それどころか、注意して見ると、底の方で泳ぎまわっている魚のすがたさえ見えるのだ。それも一ぴきや二ひきではない。そこだけでも十や二十はいると思われた。慎一は、だれもしらないひみつをしった喜びでむねをわくわくどきどきさせながら家に帰った。

家に帰ると、ものおきから鎌をだして砥石にあて、藻刈りにつかう碇型の太いはりがねの先にロープをつけた。

よく朝、ふたたび沼にいった慎一は、もってきた鎌でアシをかり、道をつけ、藻刈りをなん十回も沼になげこんでは、まわりの藻を岸にひっぱりあげた。シャベルで足場をかため、すわってつりができるよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

うに朽ちた丸太をころがしてきて、その上においた。
よし、これで準備OK、と思ったときは、もう昼近くだった。
その夕方、わずか二時間たらずの間に、慎一は十五ひきほどのフナをつった。五センチほどのものから二十センチをこえる大物までいろいろあったが、一番どきどきしたのは二十五センチのヘラブナだった。〇・六号のハリスがいつ切れるか、ハラハラしどおしだっただけに、長いやりとりのあと、そいつがたもの中におどりこんできたとき、慎一は息がとまりそうだった。
この日以来、慎一はほとんど毎日のように、この沼の、この場所にやってきてはつり糸をたれた。
とくに慎一は夕方のつりが好きだった。西の空がまっかになるころ、沼の西側の、そこだけひときわよくしげった感じのするアシの間から、水鳥の大合唱がわきおこる。するとそれをまっていたかのように、近

くの田んぼでカエルが鳴きだし、まっかにそまった水面のあちこちで魚がはねはじめる。小さいフナは小さい波紋を、大きなライギョは岸にまで広がるほどの大きな波紋を。

水鳥の大合唱は、ほとんど決まったように十分ほどで終わり、やがて沼はしだいにしずまり、夜が近づき、慎一は帰りじたくをするのである。

その日、いつものように慎一が、もう少しつっていたいな、と思いつつ帰りじたくをしていると、すぐ横のアシのしげみがガサガサッとゆれ動き、とつぜんまっ黒い犬が慎一の目のまえにおどりでてきた。

日が落ち、あたりがシンとしずまっていたときでもあり、慎一は、

「あっ。」

と、おもわず声をあげた。

その犬は、まるで墨にどっぷりつかったようにまっ黒だった。おどろいている慎一の前に、さらにもう一ぴき、黄土色の犬が、

「ワンワン。」

とほえながらとび出してきた。

二ひきともからだはそれほど大きくなく、小犬のように見えたが、どちらもあばら骨がすけて見えるほどやせていた。

このあたりは人家がない上にアシが群生しているため、犬やネコを捨てやすいのだろう。これまでも、よくアシの間からネコの鳴き声がきこえてきたり、アシの間を走りまわる犬のすがたを見かけたりした。あるときは、小さなバスケットの中にかすかな声を聞き、あけてみると、生まれて間もない子ネコが四、五ひき息もたえだえにかさなりあっていた。

おそらくこの二ひきの犬も、そんなふうにして捨てられた野良犬に

ちがいない。
慎一は少し落ちつきをとりもどし、サオをたたみながら二ひきの犬に目をやった。
黒犬の方はからだがスマートで、猟犬のポインターを思わせる、細くて長い足と尾をもっており、黄土色の犬は、骨太のがっしりしたからだつきで、ピンと立った耳といい、クルリと巻いた太い尾といい、日本犬の血をひいているように思われた。
二ひきはときどきほえながら、慎一のまわりをせわしなく動きまわる。どうやらビクに入れたフナがねらいらしく、岸辺の水の中におかれたビクの方にクンクンと鼻を向けていきたがる。
「シッ！」
と、慎一がにらみつけると、あわててわきの方へにげるのだが、すぐまたビクの方に気をとられて近づいてくる。

なん度かそんなことをくり返すうちに、犬もだんだんずうずうしくなって、「シッ」くらいではビクの前を動かなくなった。

慎一もとうとうたまりかね、

「コラッ！」

とさけんで、石をひろってなげるまねをした。その辺には小石ひとつ落ちていなかったし、それはただのおどかしだったのに、二ひきの犬は慎一が思った以上におどろきあわて、慎一がアシを刈ってつけた道をすっとんでにげていく。そのあわてっぷりがおかしく、慎一はおもわずわらってしまった。

二ひきの犬が消えていったあたりは、もううす暗くなりかけ、西の空も下の方がほんの少し赤味がのこっているだけだ。

どこかで、ジ――ッと虫が鳴きはじめ、慎一の耳もとでしきりに蚊がうなった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com